

2012年 7月13日

名古屋市長 河村たかし 様

相生山の四季を歩く会
水・森・いのちを守る ラブリーアース Japan
事務局 古川善嗣
名古屋市南区豊4-22-10 tel/052-821-6463

相生山緑地の道路建設にかかわる要望書

リーマンショックを発端に顕在化した世界経済・金融の危機は、今やEUの基盤をも揺さぶりつつあり、これまで通りの方策では解決できない様相を示しています。右肩上がりの成長・発展を期待することは、もはや不可能な時代である、ともいわれています。

東日本大震災・原発事故によって、この国の人々の意識にも、大きな変化がおこり始めています。人間の奢りから発した不用意な「開発」がもたらした結果を謙虚に受け止め、自然とヒトのあるべき関係を見据え、改めていく必要があります。

「相生山緑地の道路建設に係る学術検証委員会」からの報告書は一昨年12月にまとめられましたが、3.11以降であったなら、道路建設の評価基準も変化したのではないかと推察されます。

さて、市長の政治判断にかかわる重要な材料を提出いたします。添付資料もあって、少し量がかさみますが、ていねいな検討をいただきますよう、是非ともよろしく願いいたします。

1. 相生山緑地の生態系を把握するにあたっての重要な考察、および
2. 最近の民意の動向について、を資料とともに記述いたしますので、ご検討下さい。

1. 相生山緑地の自然生態系についての過小評価を改める必要があります。

1) 生態系ピラミッドの頂点に位置し、「名古屋市版レッドデータブック 2010」で絶滅危惧種にも指定されている、野鳥：猛禽類は、ひんぱんに確認されています。市委託の2回目の調査結果、評価・考察は見直す必要があります。 《資料①：「相生山緑地の野鳥」》

2000年～2001年の市委託（株）パスコの調査において、「・・・猛禽類が1度も確認されていないということは・・・すでに相生山の生態系が貧弱化あるいは不安定になっている・・・」《資料②：パスコ報告書 p.40 鳥類生息環境特性》とされていますが、「相生山の四季を歩く会」の定期観察会（毎月第2日曜日、2009年12月～）の記録からも、地域住民の目撃情報でも、この評価は訂正されなければなりません。

絶滅危惧Ⅱ類(VU)ハチクマ（市委託第1回調査で確認）・サシバ・ハヤブサ、準絶滅危惧（NT）ミサゴ・オオタカ・ハイタカをたくさんの方が何度も見えています。相生山緑地が営巣・繁殖にどのような役割を果たしているかは更に調査が必要ですが、渡りの中継地・捕食場としての位置を占めていることは明らかです。このことから、市街化によって孤立し、道路建設工事によって相当のストレスを受けたにもかかわらず、相生山緑地は数種類の猛禽類の生育を保障できる生態系を、かろうじて維持できていると判断できます。

多くの自然保護・保全の立場に立った方々が指摘されてきたとおり、道路建設を完全に中止し、現状で保全すれば、大都市名古屋の貴重な生態系オアシスが守られることとなります。

2) 緑地の中心部＝道路建設予定地は植生でも希少種・注目種の宝庫です。また、東海丘陵要素の植物種も確認されています。

『相生山緑地の道路建設に係る学術検証に関する報告書』では「・・・生物多様性の観点からは、相生山自体は土壤の栄養分が乏しく、乾燥した土地であると同時に、森林伐採などによって樹木

の利用が行われた結果、多様性が高い緑地とはいえない。また、過去の伐採から回復するほど十分な時間が経過しておらず、在来植生とは異なった植生帯となっている。現在は孤立した緑地として成立しているため、遷移による自然環境の回復は非常に遅い。・・・」（『報告書』 p.17）

『環境に配慮した道作り専門家会』インスペクターの「第3回検証委員会」における発言の中にも「・・・（相生山緑地は）農業には使われない、使うところでない瘠悪（せきあく）な土地、役に立たないということで残され、30年ほったらかしの丘陵になりました。・・・」などと一面的で不十分な分析が目立ち、相生山緑地の植生についての積極面は評価されていません。

しかし、市委託の調査でも、絶滅危惧Ⅱ類（VU）のジガバチソウ（ラン科）、ウンヌケ（東海丘陵要素）などが確認されています。また、前述「相生山の四季を歩く会」の今春の調査で、ジガバチソウ・エンシュウムヨウラン・シュンランについて、それぞれ数十株以上百株近くの群生が確認《資料③-1～3：画像》できています。このうちエンシュウムヨウランについては、これまでの調査結果にも記載されておらず、今後さらに調査を進めれば、新たな希少種発見の可能性も残されています。

これらはいずれも道路建設予定地の工事中断地点ま近であり、もし建設が再開され、生育環境が損なわれるならば、絶滅の危機に瀕する恐れがあります。すなわち、相生山緑地の、僅かに豊かな生態系をも失いかねないということなのです。

最近、ラムサール条約登録で注目されている、東海丘陵要素の植生が生育している土壌環境にも関心を払うべきです。緑地内には準絶滅危惧（NT）クロミノニシゴリ（ハイノキ科）複数本も確認できます。

2. 最も留意すべきは、民意はどこに向かっているかの洞察、です。

関電大飯原発への「先ず再稼働ありき」の対応は多くの国民の失望と怒りを買いました。結果、行動する人々を次々生み出しています。相生山ではどうなっていくのでしょうか？

河村市長の『工事中断』の指示以降に始まった「相生山の四季を歩く会」は2年7ヶ月で31回、名簿記載者229人、のべ830人以上（7/8現在）が参加する会にまで成長しました。

相生山に関心がある・自然を知りたい・身近な自然の中で楽しみたい、これが多くの市民の願いです。

《資料④-1、2：「相生山の四季を歩く会」アンケート結果》

《参照：ラブリーアース ホームページ <http://lovelyearth.webdeki-hp.com/>》

「市長との対話集会」で、建設推進の立場の方が「人か自然か二者択一、どちらが優先？」と発言されていました。がしかし、緑地内を歩いていて、こうした方とはお会いしたことがありません。相生山を良く知っている人ほど、相生山も私たち人間も、どちらも大切に思っています。そして、相生山の自然に接し、そのなかで学べば学ぶほど、楽しめば楽しむほど、この真理は広がるように思えます。こうした市民が、増えていきます。

相生山に親しんでいる人のなかに、人間優先の発想はありません。

生態系の保全による、「生態系サービス」＝自然の恩恵をうけながら生存していくことこそが、自然の一部である人類の本来の姿であるはずです。

くらし、開発、自然環境＝生態系との付き合い方、未来の森についての戦略的構想、などなど『相生山緑地の道路建設に係る学術検証に関する報告書』はいくらかの不十分性を持ちながらも、名古屋市民の潜在的要望に沿った、長期的課題の解決方向を示しているように思われます。

検証委員会の精神を踏まえた

市長のご英断を望みます。

願わくは、この要望書が、良い材料を提供できますことを。

以上